

日本国際文化学会

<http://www.jsics.org>

ニューズレター

2009年2月17日 発行

日本国際文化学会事務局

〒102-8160

東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学国際文化学部

熊田泰章研究室

2009年7月4(土)、5日(日)の両日、第8回大会が佐賀大学文化教育学部で開催されます。公開シンポジウム、共通論題など、プログラム概略が決まりましたので、お知らせいたします。同時に、自由論題発表者を募集しております(3月末日締切)。自由論題を含む詳細なプログラムは、次号をお待ちください。また大会参加申込書は4月以降お送りします。

日本国際文化学会第8回全国大会 ご案内

日本国際文化学会 2009年度 第8回全国大会(佐賀大学) 自由論題発表者募集

以下の要領で自由論題発表者を募集いたします。ご指導の大学院生にもお勧めください。

1) 発表内容:個人研究発表とする。

(内容により、複数の発表者による発表も可とするが、その場合も1名分の時間とする)。

2) 発表時間:1人30分(質疑応答も含む)

3) 応募資格:

応募は日本国際文化学会の会員に限る。ただし、現在会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得ることとします(入会の申し込みは学会事務局へ)。

入会手続きは、インターネットで可能です。<http://www.jsics.org/>

4) 応募要領:

氏名・現職(大学教員・有職者の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記)

・連絡先 ・発表題目 ・キーワード(3~5語)を冒頭に記し、発表要旨(40字×25行以下)を付けて、電子メールまたは郵送で以下宛にお送りください。

5) 申し込み先 佐賀大学

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地 佐賀大学文化教育学部国際文化課程 吉岡剛彦研究室

日本国際文化学会第8回全国大会実行委員会

電子メール yoshiota@cc.saga-u.ac.jp

6) 応募申し込み期限:2009年3月31日 必着

第8回大会プログラム概要

<<日程と共通論題・公開シンポジウムの予定>>

期日 : 2009年7月4日(土)・7月5日(日)

場所 : 佐賀大学文化教育学部

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地

Tel.0952-28-8274 Fax.0952-28-8118

実行委員会事務局:

佐賀大学文化教育学部国際文化課程

吉岡剛彦研究室

電子メール yoshiota@cc.saga-u.ac.jp

参加費 : 一般会員 2,000円 / 学生会員 1,000円

第8回全国大会日程

□大会前日 (7月3日)

● 常任理事会・理事会 18:00-20:00

□大会1日目 (7月4日)

●自由論題 9:00-11:00

●共通論題 11:15-13:15

1 Globalization of Care—高齢社会日本における外国人介護労働者の受け入れ

2 戦間期のアジア太平洋地域: 太平洋問題調査会(IPR)の活動とその時代を中心に

- 3 多様な「共生」を解き明かす：国際文化学をめざすもの
 4 表象政治 [ラベリング・ポリティクス] の解剖学—マジョリティ/マイノリティ二元論の内破に向けて

●総会 13:45-14:15
 ●公開シンポジウム1 14:15-17:30

＜A面/B面の国際文化学—うらがえす知のたくらみ—＞

「礫（つぶて）の気骨—九州の闇を掘る」
 司会： 鬼嶋淳（佐賀大学）
 パネリスト：佐木隆三（作家）
 荻野喜弘（九州産業大学）
 板井八重子（熊本・くすのきクリニック院長）
 久保井撰（九州合同法律事務所・弁護士）
 コメンテーター：田村栄子（元佐賀大学）

●懇親会 18:00-

□大会2日目（7月5日）

●自由論題 9:00-11:00
 ●共通論題 11:15-13:15

- 5 新自由主義と「伝統」の再構築
 6 『学生三代記 — 野球の巻』にみる昭和初期のモダン文化
 7 次世代に残すアジアの文化と技術 (3)
 8 人間をめぐる文化関係学—自然、動物、人間
 9 世界遺産への視線②

●公開シンポジウム2 14:00-17:00

＜A面/B面の国際文化学—うらがえす知のたくらみ—＞

「土の記憶—陰影のなかの文化」
 司会： 相野毅（佐賀大学）
 パネリスト：京極夏彦（作家）
 第十四代 今泉今右衛門（有田焼）
 尾形希和子（沖縄県立芸術大学）
 コメンテーター：波平恵美子（お茶の水女子大学名誉教授）

昨年7月に開催された第7回文教大学大会概況を、大会実行委員長の若林一平先生に報告していただきました。

日本国際文化学会第7回全国大会概況報告

大会実行委員長 若林 一平（文教大学国際学部）

■ 2008年第7回は湘南へ

2008年7月12日～13日、文教大学湘南校舎。昨年第6回大会は史上希な巨大台風に見舞われたのだが、今年はどうも変わって連日の快晴に恵まれた平穏な大会となった。大会への参加人数を見てみよう。

大会有料登録者総数 133名（内学生は29名）

情報交換会参加数 52名（内学生は5名）であり、登録者総数で見ると「例年並み」である。

大会の内容については、共通論題は学会本部・事務局で準備し用意し、他のプログラムは大会実行委員会において準備し、ないしはとりまとめたものである。研究発表についてみると、

○共通論題 5タイトル 発表者数 22人
 ○自由論題 発表者数 35人（A～Hの9セッションで実施）であった。

加えて、大会実行委員会が企画し実施したプログラムとして、授業フォーラム、特別講演会、公開シンポジウム、の三つがある。以下に順に総括しておきたい。

■ 授業フォーラム（大会1日目）

副題として、「国際文化学系における新しい授業の試み FD の成果と学生参加型授業」を掲げて、3大学から4人の発表者を迎えて実施された。

今回も、第一回大会以来ほぼ毎回設定されてきた、教育・キャリア指導等についての企画

を範としたものである。こうしたテーマ設定自体、既存の学会とは異なる当学会の独特な視点・文化を示している。

じっさい今回の授業フォーラムの発表もそれぞれに発表者自身の実践を踏まえた実のある内容ばかりであり、参加者からの反応もたいへん良好であった。大会に参加してよかったと会員の皆様に言うていただくためにも、今後もこうした企画が継続されていくことを期待したい。

■ 特別講演会「新時代における大学の責任」（大会1日目）

大会実行委員会では当初から、大学をめぐる新しい時代状況の中で大学人に問題提起できるようなテーマでの講演を企画し講演者を探すこととした。企画意図としては、グローバル化による市場経済化の進行、さらにはいわゆる全入時代といわれる環境下で国の文教政策に対する大学の対応、等を通して大学人が自らの立ち位置をとかく見失いがちである現状を考えて、大学の責任を問い直せないものか、と考えたのである。

このような企画意図を立命館アジア太平洋大学（APU）のモンテ・カセム学長にお話したところ、幸いにも当方の申し入れを快諾いただき、文教大学国際学部との共催により、今回の特別講演会が実現したのである。

カセム学長の講演は「勝ち組」や「負け組」の無い社会をどう作るかという世界に対するわれわれの関わり方そのものを問うものであった。大会終了後に、グローバル化の中心に

位置する米国の金融崩壊という事態が発生した(2008年9月以降)。これまで進行してきたグローバル化の根本が問い直される時代が始まったのである。今後進むであろう世界の再編成の中で、本講演会で提起された「大学の責任」はさらに新たな意味を付与され重みを持ってくると考えられる。

■公開シンポジウム「文化の戦略性をめぐって」(大会2日目)

大会実行委員会はテーマ設定を「文化の戦略性」とし、文教大学湘南総合研究所との共催で開催するというで順調に進んだ。

「企画趣旨」にあるように「文化を標榜する時代は文化を享受できる地球上の20%の人びととこれを享受できない80%の人びととの対立分断が先鋭化する」時代である。格差社会やワーキングプアとよばれる時代のキーワードは対立分断を推し進める文化の暴力性を端的に表現している。

同じ「企画趣旨」において「21世紀に入って、文化をめぐってさらに時代状況はドラスティックに変化してきた。すなわち、文化そのものが新たな商品価値となり、文化戦略無しには企業戦略が成り立たない時代に入ってきた。ネットの普及ともあいまって産業社会における覇権の移行もまた著しい」という。

このように文化の戦略性が問われる時代にあつて各分野で活躍される方々にお集まりいただきそれぞれの取り組みについてお話をうかがい問題の所在を探り解決のための手がかりについて話し合うことになったのである。

パネリストとして、「ヒバクチャー世界の終わりに」「六ヶ所村ラプソディー」などの作品を世に出してきた映像作家の鎌仲ひとみ、『メディア文化の権力作用』『沖縄に立ちすくむ』などの著書がある社会学・メディア論の田仲康博、『大衆演劇への旅』『見世物稼業 安田里美一代記』などの著書がある大衆文化論の鶴飼正樹、そして昨年『日本エコツアー・ガイドブック』を上梓したエコツーリズムの旗手・海津ゆりえ、の4氏を迎えた。いずれも文化の戦略性を語るに相応しい行動する論客とよんでいいであろう。

コメンテーターを、「編集知」をキーワードとして18世紀フランス思想に取り組む寺田元一氏をお願いした。

文化の戦略性はひとつのシンポジウムには収まりきらない大きなテーマであり、予定調和的に着地点を求められるようなテーマではない。シンポジウムは白熱し、議論は平行線をたどるかのように見えたのだが。企画者としては、今回のシンポジウムを通して、いくつかの重要な切り口が提示されたこと、さらに文化という言葉の選択そのものをめぐって対立点が明らかになったことはよかったのでは

ないか、と考えている。

■大会運営について

全国大会の開催校をお引き受けした時点から、大会運営にかんしては一括委託方式でいわゆるプロデューサーである「コンベンションサービス業」に外注するやり方を選択することに決めていた。看板作成、各種機器の設営、飲み物や弁当の注文、アルバイトの出勤管理、等々の実務の一括委託である。幸い、学内に(株)文教サービスという受け皿があり、実務的にも費用対効果の面でも一括発注は成功したものと考えている。

ホテルの手配とオプションツアーの申し込みは日本旅行藤沢支店にお願いした。ホテルの手配は20名以上の会員の利用があり、ネット時代とはいえやはり「電話一本」の手軽さは捨てがたいサービスであることが了解できた。オプションツアーの申し込みが無かったようであるが、今後は文化を標榜する学会として独自企画のユニークなツアーが展開することで大会そのものにもいくらかでも付加価値を与えることが出来るのではないかと期待している。

■お礼

APUのモンテ・カセム学長は講演の後の情報交換会にも出席いただき、その足で翌日のオランダ行きのために成田のホテルに直行された。途中の東海道の車中では居合わせた会員の方々と引きつづきの小ミーティングが持たれ、このことで会員の方から丁寧な礼状までいただいた。激務の中ご尽力いただいたカセム学長には重ねて御礼申し上げたい。

パネリストの鎌仲ひとみさんは大会直前に不慮の事故に遭われ発声も思うようにはできない状態を乗り越えて駆けつけていただいた。同じくパネリストの田仲康博さん、鶴飼正樹さん、海津ゆりえさん、それぞれに一方ならずお世話になった。厚く御礼申し上げたい。

大会実行委員の大会実行委員の山脇千賀子さん、野村美穂子さん、藤巻光浩さん、湘南総研の早川美恵子さんには最後まで献身的な協力をいただいた。文教サービスの斉藤秀喜さんには準備段階から無理なお願いばかり聞いていただいた。この場を借りて御礼申し上げます。

最後に、熊田泰章会長はじめ常任理事会の皆様には終始慈愛の心で見守っていただき、病の身にありながら白石さやさんからは時宜を得た助言をいただき大いに助けていただきました。ありがとうございました。



文教大学
キャンパス

第7回大会で特別講演をお引き受けいただいた立命館アジア太平洋大学モンテ・カセム学長のお話は、国際社会で活躍する学生を育てようとする我々にとって、大いに示唆的でありました。ここに文教大学国際学部長椎野信雄先生におまとめいただいた講演要旨を掲載いたします。

日本国際文化学会第7回全国大会
立命館アジア太平洋大学モンテ・カセム学長特別講演会報告
演題：新時代における大学の責任

報告者 文教大学国際学部長・椎野信雄

2008年7月12日午後4時～5時半、文教大学湘南校舎6101教室において、日本国際文化学会と文教大学国際学部との共催による立命館アジア太平洋大学（APU）モンテ・カセム学長の特別講演会が行われた。文教大学拝仙マイケル学長の歓迎挨拶に続き、小職の司会で特別講演会は進行した。

講演を通してモンテ・カセム学長は、「勝ち組も負け組もない世の中」の実現を訴え、新時代における大学の責任の中心にこのことを位置づけるべきだと聴衆に語りかけた。

「新時代における大学の責任」と題するモンテ・カセム学長の講演そのものの概要をとりまとめここに報告する。

【講演概要】

■ 勝ち組も負け組も無い世の中へ

我々は日常的に課題をいろいろ持って、それに直面しているわけです。その課題の答えを出すだけではダメですというのが結論です。その課題を超えて物事を考えなきゃいけないところが大学です。それが私の結論なんです。

新時代というのは何ですか。グローバリゼーションの時代ということをよく聞きます。グローバリゼーションと言ったときには、勝ち組を優先して世界の経済の繁栄を形成していくべきだという声が強いです。特に近代市場経済の番人たちの声が大きいです。だけど大学という所が、それに目をつぶって「はいそうです」と言って、走り回るべきか。もう少し間をおいて考えるべきじゃないかという感じがします。

大学のもう一つの使命は世代間に渡って、人間社会を一体化する中で、勝ち組も負け組もないような世の中を誇れるように作るためにどういうことをやるべきかということだと思います。しかし、主権国家だけを大事にし続ける限りでは、新しい問題や課題が出てくるんです。主権国家を超えて、機能的にいろんな連携、統合、交流を促進するべきじゃないかと思います。

中国やインドというすごい人口大国が軍事大国にもこれからはなりますし、経済大国にもうすぐなる道を歩んでいるわけです。だからアジアの平和と繁栄が、本当に世界の真の平和と繁栄になるためには、どういうことをやればいいのかということ念頭に置きながら、東アジアのコミュニティ形成みたいなものを考えたらいいかかと思えます。

■ 根底にある多文化共生

多文化交流の促進によって信頼関係も生まれてきます。その信頼関係が友情にまで展開すればす

ばらしいと思います。だからその信頼や友情を生み出す仕組みをどう作ればいいのかということは、国境を越えたコミュニティ形成の課題ではないかと思えます。大学は人を育てる所です。大学は人の心を形成する所です。だから新時代ばかりでなく、これはもちろん大学の永遠のミッションなんです。

国内で私が嫌になるほど聞くのが全入の時代という言葉です。全入の時代の中で大学は二分化してくる。勝ち組と負け組に分ける、という認識。だけどあらゆる協調や協力の可能性はあるんです。国際協調の時代なんです、大学にとっては。それをどう可能にするかということに進むべきです。

私が一番心配するのは、中東というのは石油資源の出所だという発想しかない方が多いです。だが、中東地域の豊かな歴史・文化が、いかに人間社会に貢献してるかということを見てほしい。近代科学の出発はその辺りにあります。アジアの通貨危機があったとき、つぶれなかった銀行はイスラミックバンクです。日本こそ中東地域と深い関係があるのにどうして見ないかということ、目先のことでとらえている、明日のエネルギーはどうなるかということばかり考えているからだと思えます。

2年くらい前にサウジアラビアのある大学を訪問したとき、私が来たのは、油が切れたら中東の将来はどうなるのか、そのような中に中東の危機社会を支える面をどう育てたらいいのか、それは日本の人材育成の偉大な経験と皆さんの今後の課題を照らし合わせて、協力して、中東の明日の番人になる人間をどう育てたらいいのかということ協賛しにきました、と言いました。会場の全員が大きな拍手してくれました。その瞬間に私は物売り商人から友人に変わったわけです。こういう努力が日本の大学こそできることだと私は思います。

■ 「ようこそ！日本」の意義：信頼そして友情あってこそ

信頼は、間違いなく日本への信頼は中東社会にあります。世界の情勢が破綻しても、約束した値段で中東の油を買ってくれたということに対して、非常に信頼関係があります。西欧諸国以上に信頼関係はあります。だけど最終的に友情がある所に金が流れるということです。だからいかに我々が友人を世の中に作るかということが大事だと思います。その根底にあるのは大学という組織なんです。

私が一つ大事だと思うのは小泉首相が始めた「ようこそ日本」なんです。世界学生観光サミットに総理が来てくれました。観光というものが大事なんです。日本に来る外国人旅行者の数が日本人が海外に出ている数より、はるかに少ないんです。100対60くらいです。あらゆる日本中の地域社会を彼らが旅して、日本のありのままの姿を見て、ほれてしまったら、友情が生まれるんじゃないかと思います。

その根底に何があるかといったら地域文化です。日本国の歴史文化、そういうものです。だから文化というものを抜いて友情は築けないのです。これは新時代の大学の責任です。

■セン先生の教え：人間の潜在的能力を育てる

私の大変尊敬しているアマーティア・セン先生が言う“Human Capability”を大事にしたら、絶対間違いなく人間の潜在的に持っているすばらしさを引き出せる。それは生徒であろうと教師であろうと同じです。そういう環境をどう作るかということが、大学を経営する我々の責任なんです。

私がセン先生に異論があるところが一つあります。セン先生は、人間の潜在的能力を向上するためには、民主主義の基盤である言論の自由、そういうものを保障しないと、人間の潜在的能力は出ないと言われます。理想としてはセン先生のおっしゃるとおりです。だけど、私の大学は82カ国の学生諸君がいます。両手で、言論の自由を保障している国を数えればいほうだと思います。

江戸時代の日本を考えたときには、言論の自由がなくても大衆が持っていた潜在的な能力を高める仕組みを持っていたんじゃないかと思うんです。日本型の職人の精神、日本型の物づくりの精神、“道”という精神を大事にして、できるだけ多くの所でそれを生かせるようにする社会づくりも考えて、人間の潜在的な能力を高める可能性があります。

この潜在的な能力を生み出して、世界の繁栄と平和に貢献できる人をどう育てるか。地球環境に配慮できるような人を育てるのは一つの中長期的な使命だろうと思っています。二番目には、これはもっと人間社会の中に絆、友情等々を高めるような誇れる人間社会を作れる人間が要るだろう。この根底に多様な社会文化的な環境で行動できる人を僕らがつくらなければならない。この環境を形成することにも貢献しなければいけないし、そこで行動できる人間にしなければならないのです。

■東アジア共同体めざして：世界水準の人に

私がいつも言うのは世界水準の人になってくれということです。明石康先生にいつも私が感心するのは、ある理念を持ってやるべきだと思ったら、獵犬みたいに噛んだものを放さないんです。私の母国スリランカの和平構築のプロセスに、私と共に入り始めた明石先生はいまだにそれをやり続けています。

やっぱり大物の道というのは、他人が通らぬ道でも選べる勇ましさがあるかということと、それを選んで歩いた後はそこに発見したものを社会の

ためか人間のためか地球のために、展開できるかということじゃないかと思うんです。

やっぱり社会的信頼を得るといえるものは、ある一部の人間を敵に回すことじゃないと思う。だから考えたら、絶対win-winの場所が大体の場合にあるんです。

学校の観光・ホスピタリティを大きくした理由は、言語文化も大きくするべきと思うけど、皆さんとも直接関係があるんじゃないかと思います。基本的には時代を読んで、地球を読んで、社会を読んで、一番難しいことですが、人を読んで、その課題と直面して構想を行動に展開する人を育てること。理性、本当は知性と書いたほうがいいのかもしれませんが。知性を刺激し、心に訴える模範的な例をプロジェクトの現場によって、展開してくれる人づくりを目指すべきです。

APUのキャンパスでは12週間を取って、各国や地域の文化ウィークをやるんです。ファッションショーもやるし、食事も出しますし、シンポジウムもします。最後にですね、舞台芸術のパフォーマンスをやるんです。あれはいつも満席です。この前インドネシアの大使が来て、インドネシアのも2回やりました。大使が来て、泣いてしまったんです。昨日はタイの舞台芸術をやって、また満席で、私も廊下の床に座って見たんです。そのぐらい、市民も入ってきたりするんです。

理性と共に感性を活用して、経験に展開することは、あらゆる現場で経験させる以上に大切で、こういうことも、その一つです。

秋葉族はなんでニートとかフリーターにならなきゃいけないんですか。なぜ宮大工が日雇い労働者ですか。この構造的な問題はどこにあるんですか。組織を大事にしすぎて、それを構成している人間をどこかで見忘れてるんじゃないですか。それを再び僕らが掘り起こさなきゃいけない新時代でもあるんです。

■言論の自由あればこそ：タゴールの「おびえない心」

最後に、セン先生がおっしゃってるように、言論の自由がある国でこそ、次世代のリーダーを育てやすいんじゃないか。江戸時代の苦しいことを再びする必要はないでしょう。APUを海外で作るお話もいただいていたのですが、そういうことでAPUを日本で作って良かったと思うんです。その側面を私の大学の理念に中におくのであれば、さっきの理性と感性の合体版のうえに、おびえない心を育てる場所にしたいんです。タゴールがインドの独立した日に詠んだ詩なんです。自分の国に持った彼の期待や思いを盛り込んだ詩なんです。「心がおびえず、誇りを持っていられるように／知る自由があるように／狭く壁に囲まれ、世を小さく千切らず／理性の透明な小川が慣れのしんどい砂漠に迷わず／いられる天国に、神様、私の国が目覚めるように <ラビンドラナス・タゴール、"ギタンジャリ"より>」と書いています。我々の大学にもこのことが言えるんじゃないでしょうか。ご静聴ありがとうございます。(満場の拍手)

＜国際文化学＞等博士号授与調査 2008年9月実施分

2008年9月に実施した博士号授与調査に対し、回答のあった西南学院大学、立教大学、横浜市立大学、神戸大学、東北大学の博士論文題目を掲載します。この調査は、今後も継続して行い、ニューズレターに順次、更新データを掲載いたします。各大学から学会事務局宛に情報をご提供ください。

1 西南学院大学 国際文化研究科

2002年度

- (1) 日本磁器の生成・展開過程の研究－有田・九谷両磁器とその周辺－
博士（文学）
刊行書『増訂 古伊万里の誕生』（古九谷論争の再検討）吉川弘文館、2006年

2005年度

- (1) 摩梭（モソ）人の母系社会構造とその変容－中国・瀘沽湖における「自然との共存」の視点から－
博士（文学）

2 立教大学 異文化コミュニケーション研究科

2007年度

- (1) 多文化組織における日本人リーダーのコミュニケーション行動に関する基礎的研究：異文化出身フォロワーの視点から捉えられるリアリティ
博士（異文化コミュニケーション）
- (2) 学校での環境教育における『参加型学習』の研究－霞ヶ浦流域地域のアサザプロジェクトの事例分析を中心に
博士（異文化コミュニケーション）

3 横浜市立大学 国際総合科学研究科 国際文化研究専攻

2001年度

- (1) 古代の和歌言説 博士（学術）

2002年度

- (1) 日本語の形成をめぐる近代日本文化交流の研究 博士（学術）

2003年度

- (1) 戦後日本における国民体育大会の研究
博士（学術）
刊行書『国民体育大会の研究』青木書店、2006年

2005年度

- (1) 統合沿岸域管理（ICZM）とソウル首都圏の持続可能な発展政策 博士（国際学）
- (2) 水資源管理政策研究序説
博士（国際学）
- (3) 乳幼児期における母親の心理的育児ストレス
博士（学術）

2006年度

- (1) 源氏物語の言説と行為性 博士（学術）

2007年度

- (1) メーヌ・ド・ピラン研究－自我の哲学と形而上学博士（学術）
- (2) 康有為の思想における明治日本の影響
博士（学術）

4 神戸大学 総合人間科学研究科（国際文化系） 博士（学術）

2001年度

- (1) リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究
- (2) 日本語教育支援のための小学校教科書の解析
- (3) 日本語、インドネシア語における態と他動性
- (4) 宮沢賢治のテキストの視覚的構造的性－光学物語としての『銀河鉄道の夜』－
- (5) 科学的知識の社会構成主義に関する社会学的考察
- (6) 日本陸軍エリート養成制度の研究－陸軍幼年学校体制の発足とその展開－

2002年度

- (1) 翻訳における語法－異化・同化ストラテジーの観点から－
- (2) ジャポニズム期のフランスにおける日本陶磁器コレクションの形成－日本陶器への開眼と交易の展開－
- (3) 感情と表情を規定する社会文化的要因についての対人相互作用的アプローチ
- (4) 道徳的個人主義の展開と「心」の聖化
- (5) 女性工場労働者がもたらす社会構造の変化－ミャンマーの市場経済移行期－
- (6) 原理目本社の研究－蓑田胸喜と歌人・三井甲之一
- (7) 縁起の形成と展開－温泉寺縁起を中心として－
- (8) 中国障害者福祉の研究－障害者福祉政策および障害者教育を中心に－
- (9) 滞日外国人留学生の家族に関する研究－家族帯同の利点と問題－
- (10) F A X機を端末とした学校災害事例検索システムの開発と試行調査
- (11) 認知カテゴリーと属性叙述における日中対照研究－「属性の階層構造」に基づく構文類型－
- (12) 映画作品における表情表出
- (13) 中国国民党革命委員会の研究－何香凝の活動と思想的変遷を通じて－

2003年度

- (1) 日本人英語学習の発音－音響的特徴および自己音韻情報に基づく問題点抽出の試み－
- (2) 日本語と中国語の主観表現副詞の対象研究－否定対極副詞を中心に－
- (3) 空間表現の日中対象研究
- (4) 空間からアスペクトへの文法化における視点問題－日本語・朝鮮語・中国語の対照を中心に－
- (5) 日本語の数の体系に関する認知的・類型的研究

- (6) イギリスにおけるシペリウス受容—シペリウス・カルトに至る特別な名声—
- (7) 他者の視線による空間的注意喚起のプロセスについて
- (8) 対面コミュニケーションにおける視点概念—発話・ジェスチャー・視線配布の動的構造に基づいて
- (9) 中国における企業文化の研究—ハイアール集団と松下電器を中心に—

2004年度

- (1) 明治維新における公文書書体の転換とそのメカニズム—視覚メディアとしての公文書書体—
- (2) 戦前の日本における近代フランス音楽の受容—ドビュッシー解釈を中心に—
- (3) 第二言語の音韻知覚学習における音響的・意味的文脈の影響
- (4) メラネシアにおける新宗教運動の人類学的研究：クリスチャン・フェロウシップ教会の形成と展開
- (5) メラネシアにおける文化の真正性とその揺らぎ—ヴァヌアツ・アネイチウム社会の伝統に関する歴史人類学的研究—
- (6) 近世後期の文人と煎茶—田能村竹田とその周辺—
- (7) ベトナムにおける少数民族と文化的アイデンティティの構築—中節沿海地方のチャム族と「伝統」・「宗教」・「信仰」をめぐって—

2005年度

- (1) 近世前期における芸芸伝承の様相—書流・松花堂流の形成過程から—
- (2) Negotiations of National Identity in Trinidad Through Calypso and Soca: A Case Study on Cultural Hybridity, Identity Politics and Popular Musics (トリニダードにおけるカリプソとソカを通してのナショナル・アイデンティティの交渉: 文化的異種混交, アイデンティティ・ポリティクス, ポピュラー音楽をめぐる事例研究)
- (3) 院政期貴族日記に見る中国古典文化享受

2006年度

- (1) 英語授業のEFL的特性分析—タイの中等学校におけるケース・スタディー—
- (2) 英語後置修飾構造の習得難易度と指導課程
- (3) 現代英語および現代ドイツ語における存在構文の成立条件について—言語コーパスに基づく分析を手掛かりとして—
- (4) 学生の学習意欲に注目したコンピュータ・ネットワーク利用教育に関する研究
- (5) アルメニア系フランス人におけるアイデンティティ再獲得
- (6) 日本語反論表現の諸相
- (7) 日本の医師患者関係における信頼とコミュニケーション
- (8) 占領期における小学校「習字」教育の存廃に関する研究—戦後書教育の出発点—毛筆習字の排除と復活をめぐる攻防—

- (9) 黒人女性の「つながり」の政治：1841-1920—ヴァージニア州リッチモンドの事例に則して—
- (10) 英領マラヤにおける華僑の経済活動について—1920年代のゴム産業を中心として—
- (11) 中国初期日貨排斥運動と日本
- (12) 被曝補償金をめぐる戦略—マーシャル諸島フングラップの事例から—
- (13) 近世後期における陶磁業構造—丹波国篠山藩の陶磁窯を中心として—
- (14) 中国における持続可能な都市交通システムの構築—都市交通の問題・背景・対策を中心に—
- (15) 中国の留学生教育政策に関する研究

2007年度

- (1) オーラル・コミュニケーションにおける挫折と修復—方略の明示的指導と評価—
- (2) 台湾における英語教育の歴史変遷—中学校英語に対する小学校英語の影響—
- (3) 談話の文法—「題目」に関する総合的研究—
- (4) 情報教育における質問パターンに基づいたボトムアップ型質問支援システムの開発研究
- (5) 自然発話にみられる人物像に応じた個人内音声バリエーション
- (6) 音声を手掛かりにした対人印象形成に関する要因の研究
- (7) 多民族社会イギリスにおける公教育の課題—シテイズンシップ教育の挑戦—
- (8) ブレア政権の教育政策における格差問題の取り組み—市場主義の下での「社会的公正」理念の行方とガヴァナンス—
- (9) チャールズ・バベッジの数学記号に関する研究
- (10) 「ムラの政治」の戦後史—西宮市生瀬地区を中心に—
- (11) 朝鮮族村落の生成と「解体」—グローバル化の中の朝鮮族の動態—
- (12) 「八紘一宇」はなぜ「国是」となったのか—近代天皇制国家における用語権威化プロセスの究明—

5 東北大学 国際文化研究科 博士 (国際文化)

1997年度

- (1) 人痘法受け入れ論争の歴史的意義の再検討—文化ならびに思想の歴史に照らして—

1998年度

- (1) 近代国家における天皇・華族社会の研究
- (2) 明治期津軽地方における洋学受容の研究
- (3) Technology Transfer and Economic Growth in East Asia (東アジアにおける技術移転と経済成長)
- (4) 東アジアにおけるハイテク産業開発—ネットワーク分業型 台湾半導体産業のケース—
- (5) 日本語と韓国語の韻律に現れる音韻・統語・談話現象の音響音声学的研究

1999年度

- (1) 近世都市空間の動態と秩序
- (2) ジェイムズ・ボールドウィンの後期小説再考—その語りを中心に—
- (3) FOREIGN AND DOMESTIC FIRMS IN HUNGARY: AN ANALYSIS OF THEIR PERFORMANCE AND PRODUCTIVITY
- (4) 中世語の史的的研究—大蔵虎明本狂言集の漢語を中心に—

2000年度

- (1) 日本語の時間表現の研究
- (2) 院政期社会における御願寺の研究
- (3) Gender and the Japanese Language: a prototype approach to gender variation in Japanese (ジェンダーと日本語: 日本語におけるジェンダー差異に関してのプロトタイプ的なアプローチ)

2001年度

- (1) 文化大革命期における近衛兵の研究
- (2) ジョルジュ・バタイユにおける時間思想の研究—歴史と瞬間—
- (3) サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤—都市民と遊牧部族民の政治的役割の分析にむけて—
- (4) 19世紀後半から20世紀初頭にかけての自然科学の発展と製鉄技術—イギリス鉄鋼業の展開と鉄鋼研究—
- (5) 井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の訂増様相の研究
- (6) 韓国開化期に日本から流入した漢語の研究

2002年度

- (1) A Sociolinguistic Study of Language Usage and Attitude among the Chinese in Singapore (シンガポール華人社会における言語使用と態度に関する社会言語学的研究)
- (2) 中国朝鮮族文学に見る朝鮮族のエスニシティ
- (3) 循環型社会の実現に資する中間処理システムのあり方に関する検討—仙台市における廃プラスチックの再資源化処理を事例に—
- (4) 春秋時代における華夷秩序の研究
- (5) 「賢治童話」に表出するオノマトペの英訳手法に関する研究
- (6) Empirical Studies on the Location Decision of Taiwanese Foreign Direct Investment (台湾企業による海外直接投資の立地決定に関する実証研究)
- (7) ドストエフスキー『罪と罰』研究—ラスコーリニコフはいかにして創られたのか—
- (8) 脳機能画像法 (fMRI) を用いた日本語の言語処理に関する研究
- (9) A Type Logical Approach to Quantification in Japanese (タイプ論理を用いた日本語の量化の研究)

2003年度

- (1) 19世紀数学の展開とその特徴について—物理学研究と数学研究の関係を中心に—
- (2) オマーン史の形成過程の研究—19世紀のイ

ギリス人によるブー・サイド朝君主の正当化—

- (3) 日・韓の自然発話データに基づく対照談話分析—言いよどみ・重なり・あいづちを中心に—
- (4) 我が国の製造業の国際的技術移転とその特質
- (5) 19世紀末の漢語の廃語化現象に関する研究—『時事新報』を中心に—
- (6) 室町時代および朝鮮時代における詩画軸に関する研究
- (7) 現代韓国語における文末形態の語用論的機能に関する研究—日本語との対照を通じて—
- (8) 日本語の語形成と動的辞書の構成に関する研究
- (9) 韓国語のテンス・アスペクトの研究—日韓対照言語学の観点から—
- (10) 言語の脳内処理過程の研究

2004年度

- (1) An Evolving Filtered Vision: A Study of Annie Dillard's Nonfiction Works (進化するフィルター・ヴィジョン—アニー・ディラードのノンフィクション作品に関する研究—)
- (2) アメリカ合衆国における「ブラック・プリズン・ムーブメント」の発生と展開—1960年代後半から1970年代初頭を中心に—
- (3) 宗教と倫理からみる志賀文学—西洋の洗礼・東洋への回帰—
- (4) 倭城にみる日朝関係史の研究
- (5) 中世奥羽の寺社と地域社会の研究
- (6) 法と規範を攪乱する言語と現代文学—アイデンティティ・ポリティックス批判をめぐる比較文学的考察—
- (7) 道家思想の形成過程—新出土資料を中心として—
- (8) 近代女性論の形成と展開—日本と韓国の比較研究—
- (9) タイ人日本語学習者による「けど」の習得に関する縦断的研究—談話データに基づく分析—
- (10) 日本における科学博物館・科学館の歴史と現代的課題
- (11) 80年代以降中国のエネルギー戦略についての考察—石炭資源の開発と利用を中心に—
- (12) The Functions of Females in Nineteenth Century Children's Literature: A Comparative Study of The Water Babies, the Alice books and At the Back of the North Wind (19世紀児童文学に見られる女性の機能—『水の子』、『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』、『北風の後ろの国』の比較研究—)
- (13) マルチメディア外国語教育システムの開発と評価に関する研究

2005年度

- (1) 日韓の巫俗文化と女性—儀礼に現れた女性間関係と地域社会から—

- (2) 日本中世地域社会における荘園村落と領主権力の研究
- (3) 所有関係構文の統語論的分析
- (4) ジーン・トゥーマー研究－混血のアメリカ人としてのアイデンティティ探求の足跡－
- (5) 日本人のチベット観－明治以降を中心に－
- (6) 鎌倉幕府守護制度の実態的研究
- (7) Construction and Transmission of Specialized Knowledge: Lexicogrammatical Resources in Japanese and English Science Textbooks (専門的知識の構築と伝達－日本語と英語による科学教科書の語彙・文法的資源－)
- (8) 韓国の科学技術政策の歴史的検討－韓日米三国の動きを中心に－
- (9) 明治期小説におけるリアリズム及び言文一致体の研究
- (10) The Nominal Structures in Adioukrou: A Typological Approach (Adioukrou語の名詞構造に関する類型論的研究)
- (11) 多言語話者の日本語学習における言語間の影響－朝・中バイリンガルを対象に－
- (12) 東アジア言語の結果構文に関する対照言語学的研究－構文の意味に関するプロトタイプ的研究－
- (13) Cultural Differences in Psychosocial Adjustments of Young Adolescents: A Cross-Cultural Study of Myanmar and Japan (青少年の心理社会的順応における文化的相違－ミャンマーと日本の比較文化研究－)
- (14) Popularizing Japanese TV: A Study of the Cultural, Political Economic, and Emotional Dimensions of the Infotainment Phenomena (大衆化する日本のテレビエンフォテインメント現象における文化的、政治経済的、感情的様相の研究－)
- 2006年度
- (1) 口承文芸論から見た『平家物語』と『ニーベルンゲン之歌』Nibelungenlied－日本とドイツにおける戦記物語の比較研究－
- (2) A Study of Meaning between a Psychiatrist and his Patients: -Based on the Transcribed Psychiatric Sessions by Harry Stack Sullivan- (精神病治療における医師と患者の意味行動の研究－サリヴァンの治療面接記録に基づいて－)
- (3) 中国語における節の構成原理についての考察－選択体系機能言語理論と神経認知言語理論の視点より－
- (4) 英語複合動詞構文の研究－構文文法によるアプローチ－
- (5) 証拠性表現の日韓対照研究
- (6) 日韓補助動詞の対照研究－日本語の補助動詞テシマウ形式の意味・用法とそれに対応する韓国語の補助動詞をめぐって－
- (7) 言語類型論の観点から見た中国人日本語学習者のモダリティの習得
- (8) A neurolinguistic study of bilingual lexical processing (バイリンガルの語彙処理に関する神経言語学的研究)
- (9) 日本語右方転移文の左方移動分析
- (10) 脳科学的アプローチによる第二言語習得研究
- (11) カロリーナ・パーヴロワ文学における「詩と真実」－『二重生活』を中心に－
- (12) The Representation of "the Foreign" in Japanese Television Commercials (日本のテレビコマーシャルに見られる「外国的なもの」の表象)
- 2007年度
- (1) Lexicogrammatical Resources of Persuasion in English and Japanese: -Metacategorisation of Persuasive Genres- (英語と日本語における説得のための語彙-文法的資源-説得のジャンルのメタカテゴリー化-)
- (2) 日本語のモダリティ表現と人称について－中国語との比較を中心に－
- (3) Development Strategy for Bosnia and Herzegovina: -Assessment of the Past and Strategy for Future- (ボスニア・ヘルツェゴビナの発展戦略－過去の評価と未来の戦略－)
- (4) クメール語の文末構造に関する機能主義的研究-日本語の構造・機能的に対応する表現との対比を通じて-
- (5) 記憶のポリティクス－心的外傷としてのベトナム戦争－
- (6) メリーランド州における奴隷制廃止と「戦時再建」-1864年州憲法制定会議における再建ヴィジョンとその展開-
- (7) イランにおける女子教育の発展-1910～20年代を中心に-
- (8) 若者言葉のフェイス・ワーカーフェイス保持に関わるディスコース・マーカ―の考察-
- (9) 第二言語習得における言語不安の研究
- (10) アジアの環境教育政策の展開と環境意識に関する研究－日韓印の中学校における事例を中心に－
- (11) 柳宗悦の民芸運動にみる技術思想
- (12) 中国首都圏における地域経済格差の縮小政策に関する研究
- (13) 日本語を第二言語とする学習者における格助詞「を」「に」の習得過程の研究－述語の他動性の観点から－
- (14) 日韓語の名詞化の談話・語用論的機能に関する対照言語学的研究－「のだ」と「것이다 (KES-ITA)」を中心に－
- (15) 近現代日本における化粧の文化史的研究
- (16) Cohesion and Coherence in English Writing (英作文における結束性と首尾一貫性について)
- (17) ユーラシアの馬伝承における日本の位置付け－馬の口承・伝承に関する比較民俗学的研究－
- (18) Online Idols and Communion in Japanese Celebrities' Blogs (オンラインアイドルと芸能人ブログにおける感情の共有について)

第7回大会総会において、若手研究者による研究を奨励し、学会発展に寄与することを目的とした日本国際文化学会研究奨励賞創設が認められました。ここにあらためてその規定を掲載いたします。

日本国際文化学会研究奨励賞規程

2008年7月13日制定

- 第1条 (名称) この賞は「日本国際文化学会研究奨励賞」と称する。
- 第2条 (目的) この賞は、日本国際文化学会（以下「学会」という。）が国際文化の発展に資する研究を奨励し、若手研究者の功績を評価顕彰することを目的とする。
- 第3条 (基準)
- 前条の目的を達成するため、次の基準を設ける。
- (1) 授与資格
- 本学会に所属する若手研究者。「若手」の定義はおおむね45歳以下とするが、論文の内容、執筆者の経歴なども考慮して決定する。
- (2) 授与対象
- 1) 直近に刊行された学会誌『インターカルチュラル』に掲載された研究論文。ただし、第1回の授賞のみ、創刊号から直近刊行号までの『インターカルチュラル』に掲載された研究論文を対象とする。
- 2) 会員の自薦または他薦により、推薦のあった研究論文。大学紀要などに掲載された研究論文に限る。研究論文を推薦しようとする者は、研究論文の写し6部、執筆者の氏名・肩書き・年齢、論文掲載紀要などの書誌項目、査読の有無、推薦者の氏名・肩書き・推薦論文執筆者との関係、2000字以内の推薦理由書等の必要事項を添えて、学会事務局に提出する。締め切りは、4月30日必着とする。
- (3) 授与件数
- 1年に1度1件を原則とする。ただし、該当者がいないときは授与を行わない。
- 第4条 (選考)
- 選考のために、研究奨励賞選考委員会を設ける。選考委員会は、『インターカルチュラル』編集委員長と編集委員長が指名する編集委員1名、常任理事会が会員の中から指名する者3名の計5名で構成し、選考委員会委員長は選考委員の互選によって選出する。選考は、選考委員会における討議を経て、選考委員の投票によって決する。討議に際し、選考委員会が必要と判断したとき、選考委員会は選考委員以外の会員に論文考査を依頼することができる。選考結果は選考委員会から常任理事会に報告し、さらに理事会の承認によって授賞者を決定する。選考委員会は選考理由を公表しなければならない。
- 第5条 (授与)
- 研究奨励賞として、本賞（賞状）および副賞（図書券5万円）を授与する。授与は当該年度の全国大会において行う。
- 第6条 (賞授与の原資)
- 学会は、研究奨励賞の本賞と副賞のための原資として、研究奨励賞基金を設ける。研究奨励賞基金は、任意の寄付を募り、それによって寄せられた寄付金をもって設置する。学会は、通常会計とは独立してこの基金を管理する。本賞と副賞はこの基金から支出する。研究奨励賞を実施運営するための間接経費は、通常予算から支出する。
- 第7条 (規程の改廃)
- この規程の改廃は、常任理事会の決議により行う。

【あとがき】 昨年（2007年）の第7回大会を振り返りつつ、ご尽力いただいた文教大学の先生方に、あらためて感謝の念を覚えます。また本年（2008年）第8回大会には、九州に視座を据えた意欲的な二つの公開シンポジウムが企画されております。多数の参加を期待します。（編集責任者：神戸大学国際文化学研究科 木下資一）